

日本応用心理学会平成 29 年度公開シンポジウム

暴力的な絆はなぜ生じるのか ―DV の予防に向けて―

日 時：2017 年 11 月 18 日（土）

場 所：帝塚山大学

企 画：日本応用心理学会企画委員会

共 催：帝塚山大学

話題提供：相馬敏彦（広島大学大学院社会科学研究科）

伊藤 言（東京大学大学院人文社会系研究科）

山中多民子（武蔵野大学大学院人間社会研究科）

指定討論：村上史朗（奈良大学社会学部）

吉澤寛之（岐阜大学大学院教育学研究科）

司 会：谷口淳一（帝塚山大学）

■企画趣旨

家族をはじめとする「絆」は愛着の源として人を幸せにする、はずです。しかしそれが人を縛りつけ暴力源になってしまうこともあります。どうしてでしょうか？この問いに答えるには、人間関係に関して豊富な知見をもつ社会心理学が役立ちます。愛し合う二人の間でなぜ暴力が生じ、エスカレートするのか？DV を未然に防ぐにはどうすればよいか？このシンポジウムでは、対人心理の視点から DV のエスカレート・プロセスを理解し、どのような予防が可能かについて考えます。

本シンポジウムでは 3 名の先生方から話題提供をいただきます。話題提供者の一人である相馬敏彦先生には企画委員会メンバーとともにシンポジウムの構成を考えていただきましたので、最初に本シンポジウムの企画趣旨についてもお話いただきます。3 人の話題提供者の発言を受けて、ともに気鋭の社会心理学者であり、規範遵守や逸脱に詳しい村上史朗先生、反社会的行動や社会的逸脱に詳しい吉澤寛之先生に指定討論をして頂き、議論を深めます。

（日本応用心理学会企画委員会）

■はじめに

司会：それでは定刻になりましたので、日本応用心理学会 2017 年公開シンポジウムを始めたいと思います。本日はお足元が悪い中、お越しいただきまして本当にありがとうございます。それでは会に先立ちまして、本学会理事長の藤田先生からごあいさつをいただきます。

藤田：皆様、こんにちは。日本応用心理学会理事長を仰せつかっております、日本体育大学の藤田と申します。本日は一般ご参加の皆様、学生の皆様、本学会会員の皆様、ご多用の所、古都奈良の帝塚山大学へお運びくださいますこと誠にありがとうございます。

私どもの日本応用心理学会は、わが国の心理学関係の学術団体の中でも日本心理学会と並んで古い歴史と伝統を誇っております。現在会員数は約 1300 名でございます。本学会は心理学の応用を目的に、社会に開かれた、また社会に貢献できる有意義な学会であると自負しております。その一環といたしまして、毎年 1 回、この時期に「公開シンポジウム」を開催しております。そのときどきにふさわしいタイムリーなテーマをもって社会にアピールすることが、本学会の社会的な責務であると考えている次第でございます。

昨年度は、『調査法のいま—理論と技法, 実践, そして展望』という応用心理学らしい公開シンポジウムを開催し, 大勢の皆様がご参加くださいました。

本年は『暴力的な絆はなぜ生じるのか—DVの予防に向けて—』というテーマでございます。会員の一人として, とても楽しみにしているところです。

このシンポジウムをご企画くださいました本学会企画委員会委員長でいらっしゃる東京未来大学の角山剛先生, ならびに企画委員会委員の谷口淳一先生にお礼を申し上げます。またシンポジウムをご共催くださいました帝塚山大学学長蓮花一己先生をはじめ, 帝塚山大学の皆様に厚く御礼申し上げます。本日も登壇の諸先生, ありがとうございます。

のちほど, 司会の谷口淳一先生, 相馬敏彦先生から, 本日のシンポジウムにご登壇くださいます諸先生をご紹介くださるものと存じます。いずれの諸先生もわが国の心理学の最前線でご活躍の先生でいらっしゃいますので, 私たちを刺激してくださるお話を聞かせていただけるものと楽しみにしております。皆様と一緒に, 私も勉強させていただきますので, どうぞよろしくお願いいたします。

簡単ではございますが, 本学会理事長としてのご挨拶とさせていただきます。ありがとうございます。

司会: つづきまして, 本講演を共催頂きました帝塚山大学の蓮花一己学長からごあいさつをいただきます。

蓮花: 皆さんどうもこんにちは。帝塚山大学の蓮花と申します。4月から学長を仰せつかっておりますけれども, 本日は応用心理学学会のシンポジウムに皆さんお越しいただきましてありがとうございます。今回のテーマの暴力的絆はなぜ生じるのかというのはもちろん社会心理学でも随分研究されておりますけれども, 暴力や攻撃とかそういう問題というのはやはり感情心理学のテーマでもありますし, またDVという問題ですとこれは臨床心理学とか発達心理学とも深く関わっている問題でもありますので, 応用心理学学会の企画としても非常に楽しみな企画だと思いますし, 研究が進んでいる反面, これからすべきことがたくさんあるテーマとも思っています。

私自身, 応用心理学学会の会員でもあります, 帝塚山大学は心理学部とそれから心理科学研究科の博士課程までがありまして, 学校の中でもこういうテ-

マというのは非常に学部, 大学院でも, 考えておく必要があるようなテーマだと考えています。皆さんきょうはお足元も悪い中大変お忙しい中お越しいただきましたけれども, 充実した一時を過ごしていただければと思います。これからもよろしくお願い致します。

司会: 次に企画委員会委員長の角山先生よりごあいさつをいただきます。

角山: こんにちは。東京未来大学の角山と申します。今期この日本応用心理学学会の企画委員会の委員長を仰せつかっておりまして, 谷口先生それからきょうご出席の東京未来大学, 大坊郁夫先生, それからきょうはお休みですが立正大学の川名好裕先生と4人でこの企画を立てております。今回3回目ということで, 3回目というのはわれわれの企画の中で今期の3回目ということになります。前2回は東京で行いましたけれども, 今度は西のほうでぜひやってみたいということで帝塚山大学をお借り致しまして, きょうこういう形で聞くことになりました。大変重要なテーマでございますので, 非常に関心をお持ちの方も多いのではないかと思えます。ぜひゆっくりと最後まで聞きいただければと思います。また討論等もありますので, ぜひご参加いただければと思います。きょうはどうぞよろしくお願い致します。

(話題提供者, 指定討論者の紹介あり)

司会: それでは最初の話題提供の相馬先生よろしくお願い致します。

■話題提供 1

暴力的な絆はなぜ生じるのか

—DVの予防に向けて—

相馬敏彦 (広島大学大学院社会科学研究科)

■絆の心理学

相馬: こんにちは。広島大学の相馬と申します。初めに「暴力的な絆はなぜ生じるのか」というこのシンポジウムを企画した趣旨とその背景について説明します。DVの問題に対して, 心理学の研究がどういったことを明らかにしてきたのか, そしてこれからどういったことを明らかにすべきか, といったことをぜひ皆さんと考えていきたいと考えています。

最初に絆という言葉を通してこれから話を展開していきます。「絆」という言葉からは多くの方がポジ

ティブなイメージを喚起されると思います。人と人との絶つことのできないつながりであるとか、離れがたいような結びつき、というのが絆の一般的な意味として捉えられるところです。同郷の絆などお互いに協力し合うような、どちらかというポジティブな関係性を指す、心理的な構成概念といえるでしょう。心理学や関連する研究領域の中でも、絆があることによって確かに人の生活が豊かになることが明らかにされています。

最近ですと『生き心地の良い町』という本が話題をよびました。どういう研究かといいますと、日本の中にある自殺率の高い市町村と低い市町村の違いを考えるものです。現場でインタビューしたり、あるいはアンケートをしたりする中でその違いとなる要因を見出していくという研究です。和歌山県立医科大学（書籍発刊時、現慶應義塾大学）の岡 檀先生を中心に進められている研究です（岡，2013）。

徳島県に海部町という町があったんです（現在は海陽町）。この町は、とても自殺率が低い町なんだそうです。なぜ自殺率が低いのか？岡先生をはじめとする研究者が調査する中で、いくつかの要因が明らかになりました。なお、ここで扱われているのは「自殺率」ですので、人口が多いから自殺者数が多いとか、逆に人口が少ないから自殺者数が少ない、といった話ではありません。海部町において特徴的に示されたのが、悩みを抱えたときに誰かに相談したり助けを求めたりすることに抵抗がない、ということです。つまり、自らがしんどい思いをしたときに、地域の中で誰かに話したり頼ったりできる絆があることによって、自殺まで追い詰められにくい、ということです。意外かもしれませんが、隣人との付き合いにおいて、「日常的な生活面で協力するか」といわれると海部町の住民が特にするわけではないそうです。そういった点では、結構ドライな関係性のようです。できないことははっきり断る、でも困ったときにはお互いに愚痴を聞きはする、そういった絆がどうやら自殺率の低さにつながっているようです。

このように絆があることによって、人の心身が健康に保たれることについて、心理学の研究でも古くから研究されてきました。社会心理学のソーシャル・サポート研究では、絆のもつポジティブな働きとして、大きく分けると二つのものがあることが分かっています。一つは問題解決を支えるということ

です。現在、直面している問題についてアドバイスをもらえたり、あるいは具体的に解決のための道具を提供してくれたりといった、具体的に問題解決を促してくれるような支えのことです。もう一つの機能は、問題解決の直接的な支えにはならなくとも、情緒を落ち着かせてくれるというものです。親身に話を聞いてもらえるだけで気持ちが楽になるといったことです。こういった支えを心理学では情緒的サポートといいます。極端なところ、後で誰かに話そうと思うだけで気が楽になって、少し視野狭窄になっていたものの見方が広がるというようなことが、絆のもつもう一つの働きなのです。精神的につらい気持ち、これを心理学では苦悩（distress）と言いますが、精神的苦悩を和らげる力が絆にはあるわけです。

日本で行われた大規模調査のデータに基づいて、精神的苦悩を和らげる力が配偶者からのサポートで強いのか、友人や親戚で強いのか、それぞれの影響力の強さを比較した研究があります（大日，2012）。縦軸は高いほど、気持ちがつらいときサポートがそれを和らげてくれる力をもっていることを表しています。役立ち度と考えてもらえばよいでしょう。左側のバーが男性回答者、右側が女性回答者です。男女に共通して、配偶者からのサポートによって、精神的苦悩が和らぐことがわかります。友人、あるいは親戚からのサポートもちろん役に立つんですけど、それ以上に配偶者のサポートがもつ力が大きいということなんですね。かけがえのない絆をもつことで、人の情緒が安定することはこういったデータで示されているわけです。ちなみに、自殺率に関しても、収入の違いによる影響などを統計的にコントロールした上でもなお、婚姻率が高い都道府県ほどそこでの自殺率が低くなることが分かっています。情緒的な絆として、配偶者や恋人との関係性をもっていることが、人の精神衛生に対して強い影響を与えているわけです。

■絆が暴力源となる

ところが、この情緒的な絆が暴力源となってしまうことがある、というのが今日の本題です。ドメスティックバイオレンス（DV）といわれる問題です。配偶者や恋人など親密な関係にある相手から振るわれる暴力のことを指します。本来、ドメスティックというのは、家庭内という意味合いですから「家庭内

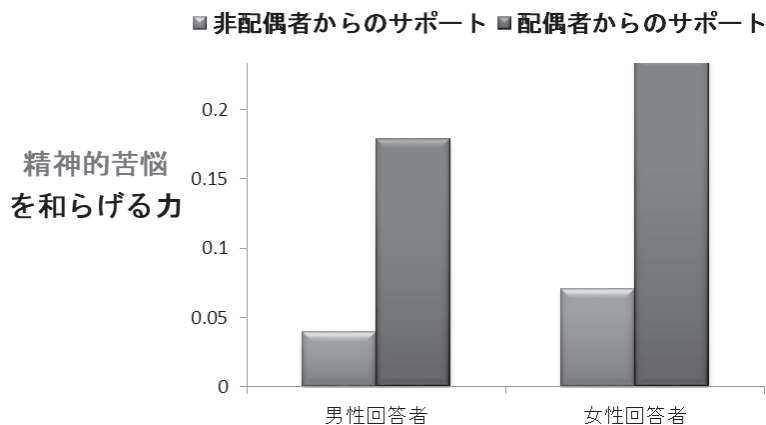


Figure 1 精神的苦悩を和らげる配偶者からのサポート力

下記の論文に基づき作成

大日 義晴. (2012). 配偶者サポートの独自性：一NFRJ08 データを用いた計量分析一. 家族社会学研究, 24 (2), 189-199.

での暴力」を指すことありますが、少なくとも日本では一般に DV とは配偶者間や恋人間での暴力のことを指します。身体的に暴力を振るうだけでなく、心理的に精神的に支配することも DV に含まれます。日本における DV 被害の報告件数について、内閣府によって公表されているデータがあります。これは数年に1度、大規模な調査を行ってその結果を公開するものです。配偶者から暴力を受けた経験が一度以上あった人が、女性だと25パーセント弱、男性でも16パーセントぐらいいます。結婚していない未婚の段階でも DV がある程度生じていることも分かっています。特に一緒に生活するようになると交際相手から DV を受けるリスクも高まることがわかっています。同居していると、そうでない場合よりも DV 被害の経験率が少し高いのです。

先ほど配偶者や恋人はかけがえのない絆であると説明しましたが、そういった絆こそが暴力源になりやすいことが、こういったデータから読み取れます。絆には一般にポジティブな意味合いが込められやすいわけですが、裏の側面もあるということです。実は絆という文字そのものに、ポジティブな面だけでなく裏の側面も込められています。絆にはもう一つの読み方として「ほだし」という意味もあるのです。手かせ足かせとして人の心や行動の自由を縛ってしまふ。それも絆の一つの側面であるといえます。

では、なぜその暴力的な絆が生じるのか、これについて改めて考えていくのが今回の公開シンポジウム

の狙いです。ただ、時間も限られていますので少しポイントを絞っていききたいと思います。

DV についてよくある疑問のうち、一つ目にお話ししたいのは、なぜ暴力を振るう人がいるのかということです。愛している、あるいは愛していた相手に対していつの間にか暴力を振るうようになるのはなぜか、です。二つ目のテーマは、DV をふるわれている人が逃げればいいのに、別れればいいのに、なぜそうしないのかという疑問です。内閣府の行っている調査でも確かに暴力を受けたからといって別れる人は半分にも満たないです。三つ目のテーマは、暴力が起きるカップルと起きないカップルの違いはどこかということです。恋人間、配偶者間全てで暴力が振られているということはありませんので、振るわれているカップルの特徴について考えてみます。

■なぜ愛する人に暴力を振るうのか？

まず一つ目の「なぜ愛する人に暴力を振るうのか」です。フィンケルという研究者が暴力加害についてのある理論を提唱しています。こういう研究の難しい所は、実際に実験室に来てもらって暴力を振るうところを観察する、なんてことが到底できないことです。そこで彼らのグループは、ブードゥードールという人形を使いました。日本でもわら人形としての同じような人形が知られています。彼らは、恋人間で起きている加害する気持ちをリアルに知るために、被験者に毎晩寝る前、スマホ上で恋人に見立てた

ブードゥードールにピンを刺してもらうようにしました。手元に100本のピンがあるとすれば何本刺したいかということ、毎晩回答してもらったのです。実際には、100本あってもほとんどの人が刺そうとはしませんでした、たまに数本刺したくなる日があったりもするわけです。その違いから、相手を傷つけたいという気持ちがどういうときに強くなるのか、その日の昼間にどのような相互作用があったのかとかを調べたのです。彼らによると、人が恋人を傷つけたいようになるには三つの要因があって、この三つが運悪く重なってしまったときに、愛する人に対する暴力が振るわれるといいます。推進因と引き金因、抑制因の三つです。推進因として想定されるのは、攻撃性の強さ、いわゆる乱暴な性格かどうかです。ここで重要なことは攻撃性の強さはあくまで一つの要因に過ぎないということです。どれだけ乱暴な人であっても、現代社会では人に暴力を振るうことは許されません。教育などを通じて、我々はそのことを身につけています。攻撃的で乱暴な人であっても、何かきっかけがない限りは暴力を振るおうとはしないのです。そのきっかけとなるのが二つ目の引き金要因です。相手が何か挑発してきたということや、「ばかにされているんじゃないのか」と感じたことが引き金になって、もともと乱暴な性格だった人の歯車が回り始めるということです。ただ、そうはいっても、やはりどれだけ親しい相手でも暴力を振るってはいけなく我々は社会化されています。ですので、ほとんどの場合、加害の衝動をもったとしても、ぐっと堪えようとします。でも、人が衝動的な気持ちに堪えるには心の余裕が必要なことも心理学の研究で分かっています。食べちゃいけない、やっちゃいけないと言われた場合、心に余裕があれば我慢できるんですが、心に余裕がない、例えば仕事でとても疲れているような場合、普段よりも自己制御する余裕がなくなり衝動に堪えることができません。この自己制御の不足という三つ目の要因が、先の二要因に運悪く重なって機能してしまった場合、相手に対する暴力が生じるというのがフィンケルたちの見解です。暴力加害が生じないようにするには、こういった多様な要因それぞれとどうつきあえばよいのかを具体的に考えていく必要があるわけです。

■なぜ逃げないのか、離れないのか？

二つ目のテーマは、逃げればいいのか、離ればいいのかになぜ離れないのかという話です。被害者側の話ですね。はたから見るとあんなに痛い思いをしているのに、なぜかまだ彼氏、彼女の元に通い続ける。DVの当事者にカウンセリングする方たちがよく言うのが、被害者には実は被害者意識がなく、むしろ加害者意識さえあるということです。そして逆に、加害者にこそ被害者意識があるとも言われます。もう少し詳しく説明しましょう。例えば加害者がなぜ暴力を振るったのかを説明する場合、被害者を指して「あいつが自分をいらいらさせるから暴力を振るわざるを得なかった」と、まるで自分こそが被害にあった、つらい思いをしたがために暴力を振るわざるを得なかったと加害者が語るのだそうです。これが加害者に生じる被害者意識です。そして、被害者の側もまるでそれに呼応するかのように「自分が至らないから相手は暴力を振るうんだ」と自分に責任があるように考えてしまうわけです。

■DVが起きるカップルと起きないカップルの違い

こういったことを踏まえてDVが起きるカップルと起きないカップルの違いを考えると、DVのエスカレートしやすいという特徴が浮かび上がってきます。DVのエスカレートの法則というものがあります。これは、相互作用の中で普段のコミュニケーションを重ねる中で、だんだんDVがエスカレートしていくというものです。つまり、付き合い始めからいきなり暴力が振るわれることはあまりなくて、まず暴力がなかった状態から徐々に精神的な暴力がふるわれるようになり、それがさらにエスカレートしていくと身体的なものにも展開するというわけです。いくつかのデータがこのことを裏付けています。ですので、DVが起きるカップルと起きないカップルの違いは、エスカレートするカップルとエスカレートしないカップルの違いは何かという問題に置き換えることが可能です。

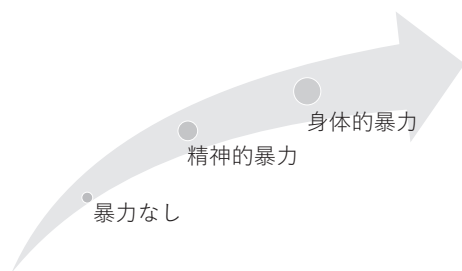


Figure 2 DVのエスカレートの法則

では、エスカレートさせないカップルの特徴はどのようなものでしょうか？データから言えることは、普段の相互作用の中で「アメとムチの原理」が働くかどうか大きな特徴です。特に、罰とか弱化といわれるコミュニケーションがあるかどうかです。暴力が生じる前の段階で、相手から理不尽なことをされた場合、それに対し「私はやりたくないよ」とか「どうして私がそんなことしないといけないの」といった批判や自己主張をするかどうか、後のDVのエスカレートに関わってくるわけです。嫌なものは嫌だというコミュニケーションがとれると、相手は同じような行動を控えるようになるからです。もちろんこれだけやっていると関係がぎすぎすしていくだけです。それとは別に相手の言動が自分にとって喜ばしいような場合には、それにも反応すること、例えば相手の親切な言動に謝意を示したり称賛の表現をするといったことで非暴力的な行動を相手から引き出すことも重要です。つまり、やってほしくない行動に対してははっきりとやってほしくないことを伝える一方、非暴力的で望ましい行動に対しては感謝や賞賛の気持ちを表していく。そうすることで暴力はエスカレートしにくくなるということです。

相手の理不尽な言動に対して批判や自己主張できるということは、言い換えれば被害者、あるいは被害者になりうる側がつかい目、嫌な目に遭わされていることを自覚した上で行動するということです。はたから見ると当たり前の行動のようにみえるかもしれませんが、実際にはそうできないことがしばしば起きます。その背景には、先ほど説明した「被害者の加害者意識」があります。はたから見ると、結構理不尽なことをされているようにみえても「私が至らなかったからだ」といった特有の考え方が、DVをエスカレートさせる土壌になってしまっている可能性が

あるということです。ではこの問題を避けることはできないのか？被害者のもつ加害者意識のように、相手のネガティブな行為をポジティブにゆがめて認識してしまうのはなぜか。このような認識がいつ立ち現れるのか？このテーマについては、これから伊藤先生に掘り下げていただきます。

■DV 予防教育の必要性

今日は、もう一つ被害のエスカレートを防ぐために重要なこととして、DVの予防教育の必要性についても話題提供していただきます。DVを社会的に減らすためには、どんなに親しい間柄でも嫌なことは嫌だって言っていんだよ、ということをDVを経験したことのない人にも事前に知ってもらうことが有効です。そこで、そういったコミュニケーションの重要性を伝える教育の必要性にいきつくわけです。これについては、既に山中先生を始めとして、私も入って予防教育の試みを行っていますのでその成果を説明していきます。

予防教育を行う上で考えるべきは、「誰を教育するのか」ということです。普通に考えると、被害者になる可能性のある人、あるいは加害者になる可能性のある人に対して教育をするということになるでしょう。それはその通りですね。ただし、もう一つ教育の対象とすべき役割を持った人がいます。先ほど、被害者にならないためには適切な批判や自己主張が必要だという話をしました。そして、そのためには相手の不適切な行動に気づけなければならないわけですが、これが実際には難しいとも言いました。「本当に相手が理不尽なのか」、「もしかしたら相手の言っていることが正しいかもしれない」、「私の独りよがりかもしれない」といった揺らぎが生じるわけです。そういうときにどうすればいいかというと、一人で考えないことです。分かりやすい言い方をすれば、誰か友達に相談してみる。冒頭の話しにあったように、悩み事を相談する、あるいは相談できると思うだけで人は自分の見方に自信を持つことができます。ですので、相手の理不尽な言動に批判や自己主張をしていくためには、関係の外側に頼れる人がいることが重要なわけです。

被害者でもない加害者でもない第三者もDVを防ぐ、あるいは予防する上では重要な立場であるということです。親密な間柄が絆でもある一方で「ほど

し」にもなるといいましたが、ほだしから人を救うのもまた別の絆だということですね。これについて、実際に周囲に頼れるような人がいる地域ほど、そこに住む女性がDV被害に遭いにくくなるというような研究があります。DVのエスカレートを防ぐためには、風通しのいい関係性を作ることが大事になってくるわけです。

予防教育で対象とすべきは、受講生が被害に遭わないように、あるいは加害をしないような当事者となることを防ぐことに加え、受講生が第三者としていかに自分のコミュニティの中にいる友人や知人のDVのエスカレートを防ぐかということも考えたほうがよいということです。山中先生にはこの点について詳しくお話ししていただきたいと思います。「夫婦げんかは犬も食わない」ということわざにあるように、2人のことは部外者には分からないんだから放っときましょう、という第三者の心理がはたらくこともあるようです。DV被害に遭った人に対して行われた調査では、誰かに相談をしたけれど半分は味方になってくれなかったというデータがあります。

ここまでお話ししてきたように、DVは異常な個人の問題ではなく、関係性の問題、絆の問題です。しかもそれは当事者2人にだけ原因があるという発想ではなかなか防ぎにくく、当事者2人とその周囲にいる第三者との関係性も踏まえた視点、つまり社会心理学のテーマとして研究される必要があるだろうということで、これからお二人にお話をしたいと思っています。

■話題提供 2

いやなことをいやだと感じるための心理学

伊藤 言（東京大学大学院人文社会学研究科）

伊藤：皆さんこんにちは。東京大学の伊藤と申します。先ほど相馬先生のお話を引き継ぎまして、嫌なことを嫌だと感じるための心理学というお話をさせていただきます。

■大切な被害者意識

例えばパートナーにひどい行動をされてしまったというような場合があるとします。先ほど相馬先生のお話で、被害者意識を持つことがとても大切だと

いうことでした。パートナーの理不尽な言動に対して、批判や自己主張をできることがとても大切です。理不尽な行動の被害者は被害者目線で行動すべきです。しかし批判や自己主張をする前に、まず嫌なことをされたら嫌だという気持ちを持つ、嫌なことをされたら嫌だと感じるのが重要なんですね。これはおかしいぞ、嫌だぞと感ずることが必要。どうすればそういう気持ちを持てるのかというお話をさせていただきます。

恋人からひどい行為をされたときに嫌だと感じる人もいれば感じない人もいるとするならば、恋人の行為、パートナーの行為と自分の感情というものはダイレクトに結びついているわけではないだろうと。その間に恋人にされた嫌なことをどう捉えるのか、どう考えるのか、どう受け止めるのかという認知というものが入っていると。ある受け止め方をすると恋人にひどいことをされてもそれほど嫌じゃないと。それはどういう場合かというお話をさせていただきます。ちなみにこれは臨床心理学の分野で古典的な研究でエリスのABC図式（Ellis, 1955）と呼ばれるものですが、嫌だと感ずるためにはどのような認知が必要なのかというのをお話しさせていただきます。

■具体的/抽象的認知

そこで私は具体的、抽象的という問題からここに切り込んでいきたい。相手にされた嫌なことを正当化してしまう。どういう場合に生じるかという相手の気持ちや心、行為の意図を読み過ぎた場合に相手にされた嫌なことを正当化してしまうんじゃないかと私は考えています。例えば恋人が何か手を上げて殴ってきた、あるいはひどいことを言ったと。でも私のためを思って言ってくれたと思うならばそれほど嫌じゃない、仕方ないよね、私のためを思ってくれたんだからと感ずるかもしれません。

これからお話しする物事を具体的に捉えてしまう人というのは、嫌なことをされてもすぐ嫌だと感ずられるんですね。相手の気持ちや心、相手が何でこういうことしてくれたんだろうっていう行為の意図を読むことが苦手な人がいます。そういう人というのは嫌なことをされてもダイレクトに嫌だと感ずやすいです。自閉症スペクトラム傾向が強い人の特徴というのは、他者の心を読むのが苦手だということと

す。私のために思ってしてくれたんだと考えずに、殴られたと、嫌だというふうにダイレクトにそこが結びつきやすいわけです。逆に言えば、他者の心を読むことができれば相手にされた嫌なことを正当化してしまう可能性があるということです。自閉症スペクトラム傾向が強い人の特徴は、他者の具体的な行為から抽象的な意図を読むことが苦手だと。何でこういうことをしたんだろうというのはあまり考えないってことです。逆に言えば、された行為に対する意味づけに惑わされにくいということが言えるかと思います。相手の意図、私のために思っていると思ってなかりと殴ったことは殴ったことだと。相手の意図は何であろうと殴られたことは殴られたことだと捉えられれば、嫌だという気持ちが生じるんじゃないかと考えているわけですね。

自閉症スペクトラム傾向が強い人の認知の特徴は何かと言いますと、具体的な認知が得意で抽象的、全体的な認知が苦手だと。自閉症の方というのは、部分の道程が非常に素早いんですけども、全体の道程になると何か困難が生じてしまうという所があります。つまり木を見るか、森を見るかという日本語がありますけれども、相手にされた嫌なことを嫌だと感じるかどうか、木を見るか、森を見るかと具体と抽象という認知が関わっているんじゃないかと考えているわけですね。

もう少しお話をかみ砕きますが、人間の認知の大きな特徴として具体と抽象の間を行ったり来たりすることができるということがあります。皆さん心にイメージしていただきたいんですけども、きょうここまで何で来られましたか？ 心に一つ単語を思い浮かべてください。いろんな考えをお持ちになられたかと思うんですが、JR で来たよとか車のベンツで来たよ、プリウスで来たよ。プリウス、ベンツって考えられた方もいるかもしれませんが。あるいは車と考えられた方もいるかもしれませんが。あるいは乗り物で来たよと考えられた方もいるかもしれませんが。つまりこれはカテゴリー認知のお話なんですけれども、具体的な奈良交通バス、JR バス、この具体的なものに共通する要素としてバスという抽象的なカテゴリーがありますよね。バス、電車、車に共通するのは乗り物ということです。

例えばカテゴリー認知に絞っても人はこの抽象的にきょう乗り物で来たんだと思う場合もあれば、JR

で来たんだ、奈良交通バスで来たんだと思う場合もあるかと思います。具体と抽象の間を行ったり来たりすることができる、これが動物とは違う人間の心の本当に大きな特徴です。

先ほどの自閉症スペクトラム傾向の方の話に戻しますと、非常に印象的なのがサヴァン症候群と呼ばれる方がいます。自閉症の中で一部の方なんですけれども、彼らは細部の具体的な記憶に非常に優れているんですね。30 分間ヘリから町を眺めただけでも街並みを再現できる方もいるそうですが、私たちからすれば高層ビルだねと。先ほどのカテゴリー認知で言えば上の方ですね。非常に抽象化してきれいな景色だね、高層ビル群だねと考えてしまっただけ具体的な所は記憶からばさっと切り捨ててしまうわけです。しかし細かな部分をずっと保持し続けられるこのように街並みを再現できるかもしれないと。ありのままのものをありのままに見られるかもしれないということですね。

この抽象、具体っていう問題は、カテゴリー認知だけのお話ではありません。行為の認知にも関連しています。皆さん今何をしていらっしゃるでしょうか？ 心の中で一つ自分のしている行為のイメージを持っていたきたいんですけども。例えばスライドに顔を向けていると考えられた方もいるかもしれません。あるいはスライドを見ている、メモを取っています、声を聞いていますと考えられた方もいるかもしれません。あるいはシンポジウムに参加していますと考えられた方もいるかもしれません。DV の知識を学んでいますと考えられた方もいるかもしれません。このように行為っていうものも抽象と具体の間に幅広く分布しているっていうことですね。知識を得るという大きな目標をより具体化すると、例えばこのシンポジウムに参加すると。別に本を読んでもいいわけです、テレビを見てもいいわけです。シンポジウムを見るという行為をさらに具体化すると例えばスライドを見る、メモを取る、声を聞き取るっていう形になります。スライドを見るという行為をさらに具体化すると、顔を向ける、目を細める、いろんな行為を思いつくことができるでしょう。つまり私たちが自分、あるいは他者の行為をどう捉えるかというときに抽象、具体という問題が常に絡んでくるわけです。どのようにと考えるとどんどん行為が具体的に降りていきます。でもなぜと考えると行為がどんど

ん抽象のほうに向いていくわけですね。スライドを見ている、皆さんは。なぜですか？ と問われれば、シンポジウムで知識を得るためだよと恐らくお答えになると思うんですが。行為の意図ですね。先ほどのお話で言えば、何で私にこんなひどいことをしたんだろう、何でとどんどん考えていくと抽象の方に向かっていくわけです。

話が見えにくいかもしれませんが、まとめておくということをお願いいたします。行為をどれくらい抽象的に捉えるかには個人差が存在します。パートナーの行為を抽象的につまり何でこんなことしたんだろう、この人はと捉えがちな人は、パートナーからされた具体的な行為に対してさまざまな意味づけを行うでしょう。私のために思ってくれたんだとかですね。つまりパートナーの行為の意図、心を読む、相手の心を読むでしょう。そのときパートナーにされた嫌なことを嫌だと感じなくなってしまう余地が生まれるのではないかと考えているわけです。具体的に考えれば、殴られた行為は殴られた行為だけれども抽象的に考えると、私のために思ってくれたからこういうことをしたんだと、された嫌なことを嫌だと感じない余地が生まれてしまうということです。

もうちょっと具体例を出しましょう。このようなひどいことをされたときにどのようにこうしたんだろうと具体的に考えることもできれば、なぜこういうことをしたんだと抽象的に考えることもできます。具体的に考えれば3回殴ってきたと、暴言を吐いたという形になるでしょう。一方抽象的に考えれば、私を傷つけようとしたんだ、嫌だという方向性の抽象的な認知を行う場合もある一方で、許せないと私に伝えるためにこういう行為をしてくれた、したんだというふうに相手を正当化してしまうような余地が生まれると。

もう一度まとめますと、相手の行為を具体的に捉えるならば、された嫌なことは嫌なことのままです。しかし抽象的に考えると、そこに相手を正当化してしまうような余地が生まれるのではないかと。抽象的な認知を行うと相手にされた嫌な行為の正当化の余地があるんじゃないかと考えているわけですね。

抽象、具体という問題ですけれども、実際に私たちが対人認知と呼ばれる分野で他者を認知するときに抽象的な認知を行う場合と具体的な認知を行う場

合、脳の部位が大まかに分かれていてこの二つのプロセスで他者を認知しているということが近年の脳科学的な知見から明らかになっています。

話をまとめると次の通りになります。恋人にされた嫌なことを嫌だとすぐ感じるわけではない。その間に恋人にされた嫌なことをどう捉えるかという認知が入っていると。この認知を行う際に抽象的に考えてしまうと嫌だと感じにくくなるのではないかといいことですね。なかなかなじみのないお話だと思いますので、非常にまどろっこしく感じられたかもしれませんが、何かそういう夢みたいな話をしているんじゃないのかと実際にデータはあるのかというお話をここからしていきましょう。

■実証的データによる検証

実証的なデータによる検討です。恋人の行為を抽象的に解釈しがちな人は、恋人に嫌なことをされても嫌だと感じにくいのではないかとという仮説を立てました。

どう調べるか。例えばアンケートをしたとしましょう。あなたは恋人の行為を抽象的に捉えがちですか。配偶者の行為を抽象的に捉えがちですか、とアンケートをしたとしましょう。皆さん困ってしまいますよね。そんなことは答えようがないよと。つまりこれでは何を答えればいいのか、答えるほうもよく分からないと思うんですね。アンケートは皆さん、使いたくなるかもしれませんが、アンケートの特徴というのは、普段の行動や思考を要約したものに対する認識を問うているわけです。皆さん、普段生きる中で自分のことをどう思っていますかというような、自己認識の要約的なものを尋ねているわけですね。すると、価値観や信念みたいなものを測定することはできると。例えば、自民党は好きか嫌いか、自民党を支持するかしないか、価値観や信念のようなものを特定することはできても、本人が自覚していない日々の行動や趣向の癖をアンケートによって測定することは極めて難しいわけです。

そこでどうすればいいか。最近ですね、スマートフォン、誰でも持っていますよね。なので測定方法として発達してきているのは、経験サンプリング法と呼ばれる手法です。この手法を用いて私は研究を行いました。どういう手法か。1日に何回か、例えば5回、11時半、12時45分、13時37分というような、

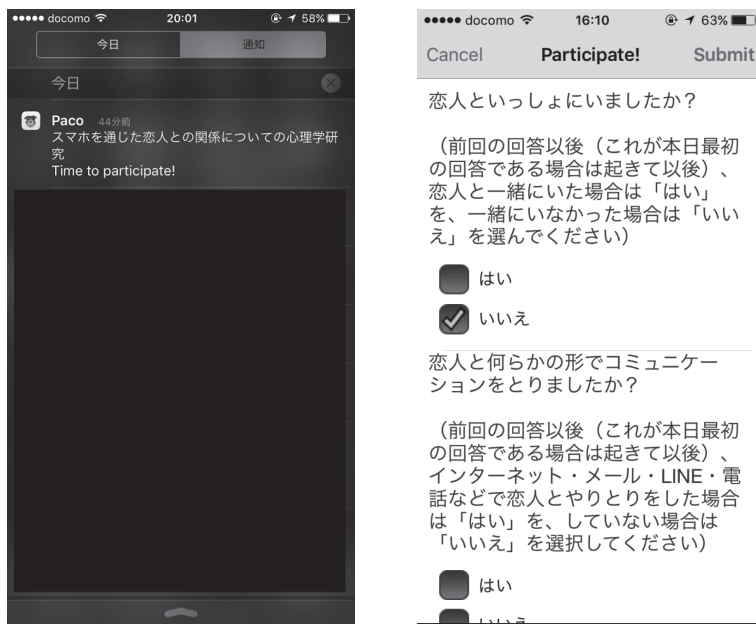


Figure 3 経験サンプリング法を実行するアプリ Paco の画面例

1日に何回もランダムな時刻に、人々の日常の経験を切り取るサンプリング、切り取って抽出するアプリです。どうやってやるか、こうスマートフォンがぶるぶると鳴るわけです。で、答えるわけです。過去2時間以内に恋人とやり取りしましたか。恋人にどんな行為をされましたか、何を考えましたか、そのときにどんな気分になりましたか、というのを答えてもらうわけです。これを何日間か、例えば7日間、1週間にわたって計測すると。すると1人当たり、1日5回×7日間で合計35回分のデータが取れるわけですね。こうすることで、つまり、皆さん、今この直近の、例えば1時間のあいだに何を考えたか、ということがあったかというのを覚えていらっしゃいますよね。なので直近の行動を何回も何回も繰り返す、サンプリングすることで、人々の経験全体の性質っていうものが見えてくるわけです。これが経験サンプリング法と呼ばれる手法です。

これ (Figure 3) はある日の画面ですが、アプリを使ってこう、通知を出すと。恋人と一緒にいましたか。はい、ならばすぐに回答してもらいます。いいえと答えた場合は、恋人と何らかの形でコミュニケーションを取りましたか。例えばEmailであったり、電話であったり、何らかの形でコミュニケーションを取りましたかというのを尋ねます。

実際のデータなんですけれども、恋人と何らかのやり取りをした場合、しなかった場合、実際に恋人と何らかのやり取りをするのはおよそ半数なんです。恐らく付き合ってる方っていうのは、大体生きてるうちの半分ぐらいのあいだは、恋人と過去2時間以内に何らかの交流を持っているのではないかと。恋人と何らかの直接的あるいはEmail等を通じてやり取りをした場合は、12個の行為とリストの中から、恋人にされた行為というものを選択していただきました。これは事前の別の調査に基づいて、おおよそ恋人のあいだでこういう行為が生じるよというものをピックアップしているわけですが、嫌な行為であれば、例えば、怒られたと、責め立てられたと、意見をつけられたと、束縛されたと、無視されたと、行動を制限されたと、大体恋人の間で起こる嫌なことってここに収束すると。良いことであれば、感謝の気持ちを伝えられたと、話を聞いてもらえたと、好意を示されたと、外見をほめられたり、必要なときに話を聞いてもらえたり、気にかけてもらえたり、こういうものが起きているかどうか、この12個のリストのうちに、恋人にされた行為があるかどうかというのをまず選んでもらいます。

選んでもらったうえで、選択した恋人の行為を、記述するのにふさわしい表現というのを抽象的な表現

と具体的な表現、どちらか片方を選んでもらいました。例えば、無視されたという行為を選んだ場合、抽象的な表現であるならば「気に入らないのであなたを避けようとする行為」、具体的な表現であれば「あなたに返事、返信するのをやめた」のどちらの表現がその行為を表すのにふさわしいのかを答えてもらったわけです。これを行為が起きるたびに何度も何度も繰り返すわけですね。外見をほめたのであれば、なぜと考えれば、「あなたが好みであることを伝える」ためにほめるってことですよね。どのように外見をほめるかといえば、「かっこいい、かわいいうって」行為ですね。つまり抽象表現と具体表現、どちらか片方、どちらがあなたがされたことを表すのにふさわしいかというのを、毎回毎回選んでもらうわけです。最後に恋人にされた行為をどれぐらい受け入れられるかというのを報告してもらいます。とても嫌な行為だったから、とても良い行為だった、1点から7点。あるいはとても嫌な気持ちになった、あるいはとてもいい気持ちになった。つまり恋人にされたことをどれぐらい、感情的に受け入れられたかというのを答えてもらいます。

結果をご紹介します。相手にポジティブな行為、先ほどのリストの中で、ほめられたとか、そういうポジティブな行為をされた場合には、抽象的に捉える人も、具体的に捉える人も、恋人にされた行為をどれぐらい良いと感じるのかに差がないと。しかし、相手にネガティブな行為をされた場合は、抽象的に捉える人は4点ぐらい受け入れると。4点程度良いと感じるのに対して、具体的に相手の行為を解釈する人は、2点ぐらいにしか感じない。つまり、嫌だと感じているということですね。相手の行為を具体的に捉えると、嫌だと感じる一方で、抽象的に捉える傾向がある人は、良いと感じる。こういう差が見てとれたと。恋人にネガティブな行為をされても、恋人の行為を抽象的に認知する傾向がある人は、恋人の行為を受け入れやすいと。嫌だと感じにくいということです。これは、行為をされたあとにどんな気分になったかという質問をしても全く同じですね。恋人にネガティブな行為をされても、恋人の行為を抽象的に認知する傾向がある人は、肯定的な感情を持ちやすいと。

しかし、待ってください。先ほどご紹介しました通り、恋人の行為を具体的に捉えれば、嫌なことをされ

たら嫌だとなる。抽象的に捉えれば、嫌な場合もあれば、嫌じゃない場合もあるっていうお話をしましたが、どういう人がこの正当化を行うか。恋人に嫌なことをされてもそれを正当化するような抽象的な認知を行うのは、どういう人だろうというのがさらに気になるわけです。そこで、経験サンプリング法ではなく、普通のアンケートを使っていくつかの個人差というものを測定しました。パートナーとの関係に対する信念。そして相談できる知人の数。また恋人との関係に対する満足度というものを尋ねました。

これは経験サンプリングの調査の前と後の2回測定しているのですが、まずパートナーとの関係に対する2種類の信念の結果からご紹介します。恋人との、パートナーとの関係に対する信念には2種類あるということが知られています。一つ目が運命信念といわれるものです。もう一つは成長信念といわれるものです。運命信念とは、恋人との相性は合うのか合わないのかを初めから決まっているというような、相手との関係を固定的に捉えるような信念のことです。こういう信念を持っていると、しばしば恋人の理想化につながりやすいと。その対になるものが成長信念と呼ばれるもので、恋人関係の障害が乗り越えられると。つまり何か嫌なことがあっても、それを受け止めて2人で関係を変えていけば乗り越えられるというような信念ですね。こういう信念を持っていると、相手にされた嫌なことを嫌だと指摘することで、関係を成長させられるんじゃないかと考えている。こういう人たちもいるというわけです。

この信念の効果を見てみると。恋人にネガティブな行為をされた場合のデータだけご紹介しますが、具体的に相手の行為を捉える場合は、運命信念が強くても弱くても、恋人にネガティブな行為をされた後にいい気分になるか、悪い気分になるかというのは差がないわけです。でも恋人にされた行為を抽象的に捉えた場合には、運命信念、つまり合うか合わないか初めから決まっていると捉えている人は、恋人にされた嫌な行為を好意的に捉える。運命信念が弱いと、恋人にされるネガティブな行為は、嫌だと捉えるということです。つまり運命的に結ばれていると思っている人は、恋人にされた嫌なことを正当化するような抽象化を行いやすいということですね。恋人の行為を抽象的に認知したとき、運命信念が強い人は、恋人に嫌なことをされても、嫌だと感じにくい

と。

また、他者の存在というのも、今回のシンポジウムの大きなテーマになっているかと思うのですが、こういう質問を行っています。あなたと仲が良く、恋人と直接つながりが無い友人、自分だけの友人が何人いますかというのを尋ねています。恋人とも知り合いじゃない、自分だけの相談ができる友人ですね。つまり恋人の心を読まない友人が何人いるのかというのを尋ねています。すると、ネガティブな行為をされたことを抽象的に捉えた場合に、それを良い行為と感じたか、悪い行為と感じたかですが、友人の数、独自の友人の数が多いと抽象的な解釈を行ったとしても、悪い行為をされたときに、それを良いものだとは感じにくいと。嫌だときちっと感じるということです。しかし友人の数が少ないと、抽象的な解釈を行ったときに、相手に嫌な行為をされると、良いと感じてしまうということです。つまり何が言いたいかといいますと、恋人の行為を抽象的に認知したとき、相談できる知人数が少ない人は、恋人に嫌なことをされても嫌だと感じにくいということです。

結果をまとめておきましょう。相手の行為、恋人の行為を抽象的に捉えると、恋人のネガティブな行為を肯定的に捉えるようになります。そして恋人のネガティブな行為を肯定的に捉えることによって、恋人関係により満足していくというような結果が得られました。抽象的に捉える、抽象的認知を通じて恋人のネガティブな行為を肯定的に評価してしまう。そのことで関係に対して満足度が高まっていくというようなプロセスが見られました。

■相手にされたいやなことをいやだと 感じるための条件は？

話をまとめておきましょう。相手にされた嫌なことを嫌だと感じるための条件はという話をしてきました。実証的研究からのメッセージの一つ目、抽象的な認知にはとにかく気をつけろということです。相手の行為や意図の目的、何で私にこういうことをしたんだろう、なぜを考えてしまう傾向があると相手にされた嫌な行為の正当化につながりやすいという。なので処方箋としては、相手に嫌なことをされたら、なぜこんなことをするのか、と考えるのではなく、どのようにその行為をしたかと具体的に考える。何をされたか具体的に考えようってことです。

どのように？と考えて、相手を切断するというのがまず必要なことではないかと。抽象的、具体的な認知をコントロールするためには、なぜ？、あるいはどのように？、と考えることが有効だと社会心理学で指摘されています。なぜ？と考えると抽象的な認知が、どのように？と考えると具体的な認知が促進されます。

また私たちの別の研究なんですけれども、これは、実験的な研究なんですけれども、他者の犯罪行為というものを想像してもらいます。なぜ？、あるいはどのように？というのを考えてもらいます。例えば、Aは人をハンマーで殴っていますというのをシナリオ付きで読んでもらうわけですね。そのあとに、なぜこの人はこういう行為をするのかと抽象的な考えをしてもらうか、どのようにその行為をしているのかという具体的な想像をしてもらうか。その上で、条件分けすると、このなぜという抽象的な行為を想像すると、相手の犯罪行為を許してしまうという結果が得られているんですね。つまり正当化の余地が生まれてしまうということです。

また、実証的研究からのメッセージの二つ目。運命信念に気をつけると。相手との関係を改善していこうという成長信念ではなくて、相手との関係を固定的に捉える、つまり運命信念が強い人は、恋人にされた嫌なことに肯定的な抽象的な意味づけを行いやすいと。正当化してしまいやすいと。なので処方箋としては、相手との関係を固定的に捉える運命信念が強い人は、相手にされた嫌なことの抽象的な意味、相手の行為の意図を考えるのはだめですよ。なぜ？と考えること。された嫌なことを具体的に、より鮮明に想像することが必要なのではないのでしょうか。できれば相手との関係を運命的、固定的に捉えないことが大事なのではないのでしょうか。

また三つ目のメッセージですが、第三者の目を入れると。恋人にされた嫌なことに對する自分の意味づけの偏りを、客観的に見つめてアドバイスできる第三者、知人、友人、サポーター、社会的なネットワークもとても大事じゃないかなと。特に恋人の心を読まない、自分だけの独自の友人の存在が大事なのではないかと。

■DV 予防プログラムへの提言

そしてDV 予防プログラムへの提言としては、な

るべく具体的なレベルで、介入ルールを決めてあげたらいいんじゃないかと。例えば、嫌だと感じたらすぐここに電話してきてくださいという介入はあまり効果がない。そうではなくて、相手が死ねという言葉を出したら、この番号まで電話で報告してというように、具体的な条件付けのような、もし何何なら何何をしてというルールをつくってやることで、DVに対する介入がより効果的なものになるのではないかと考えています。また特に、経験サンプリング法と呼ばれるものを使うことで、これは日常経験を測定するだけではなくて、介入にも非常に適した手法なんですね。このもし何何ならこうするという規則的な介入が可能です。実際、臨床心理学の分野では、この経験サンプリング法を用いて介入研究が行われているんですが、例えば、スマートフォンにもいろんなセンサーが付いています。加速度計、GPS、まあいろんなセンサーが付いているわけですが、このスマホのセンサーデータというものを利用することで、行動の文脈情報を自動的に測定できます。文脈を自動的に測定することで、自動的に介入ができる可能性というものがあります。例えば、けんかや言語的暴力をスマホが察知することは、恐らく技術的に頑張れば可能でしょう。恋人を含めた2人のスマホが近くにある。例えばGPSとか、Bluetoothセンサーでそれは分かるわけです。その上でスマホのマイクセンサーの大きな、わってという音のバースト、音の破裂音を拾ったときの、これは音声センサーで測定可能ですが、そのときに何か、大丈夫ですかと、今、なぜと聞いていませんか、具体的に考えていますか、ここに電話していますかというような、介入的なポップアップを出すということは可能ではないかと考えられます。

■他者といえるために必要な技法

最後に、DVという話を越えて一つメッセージを送りたいんですけども、私たちは分かります、分かってもらいたいと考えるわけです。でもですよ、相手の心の動きが100%分かるなら、もはや自分の自由は存在しないですよ。相手の苦しみも丸ごと分かるなら、もはや自分の呼吸はできなくなってしまうわけです。つまり分かる、分かりたいという気持ちを突き詰めていくのは良くないだろうと。一方で、自分の心の動きを100%分かってもらえるなら、もは

や自分の自由は存在しないですよ。自分の考えを相手が丸ごと全て理解してくれるなら、もう全て相手に筒抜けということですので、自分の自由は存在しないと。さらに、他者といえるために必要な技法というのは、相手を適度に理解して適度に理解しないということです。また適度に理解され、適度に理解されないということです。そのバランスが非常に大事なのではないかと考えています。どうそのバランスを取るかといえば、抽象的、具体的な認知を使い分けることで、理解すること、理解されることのバランスを取れるんじゃないかと。相手の行為を具体的に考えて、心を考えないことで、相手と距離を取ることができるんじゃないかと考えているわけです。

■話題提供 3

起きる前に防ぐ

―DV 一次予防プログラムを実施して―

山中多民子（武蔵野大学大学院人間社会研究科）

山中：皆様こんにちは。武蔵野大学大学院の山中多民子と申します。12年ほど前から「DV・虐待予防研究会」という任意団体で、DVの予防啓発活動やカウンセリング、加害者プログラム等を行っております。きょうは、DVを「起きる前に防ぐ」ということで、これまでに実施したDVの一次予防プログラムの内容や結果と、そこから見えてきたものについて皆さんにご紹介したいと思います。

■DV 一次予防のためのプログラム

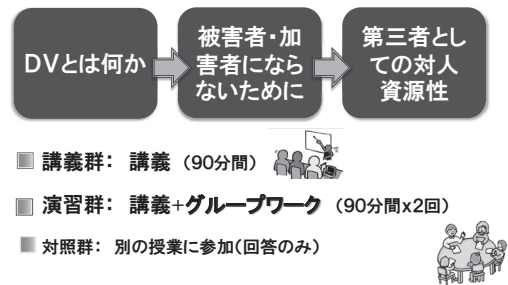
今回行ったプログラムは、先ほどお話のあった相馬先生や、精神保健福祉士やCAP（子どもへの暴力被害防止活動）の実施者など、異なる領域のメンバーと一緒にしました。DVはもはや個人的なめごととかトラブルではなく、周囲や社会にも大きな影響を与える公衆衛生の問題であるということは、これまで先生方からお話がかった通りです。それをどう防ぐかといったときに、公衆衛生の予防の考え方として、「一次予防・二次予防・三次予防」というものがあります。問題を未然に防ぐための一次予防、早期に気付いて介入や改善をしていく二次予防、そして再発を防ぐための三次予防です。今回の研究では、「起きる前に防ぐ」ということで、一次予防に焦点を当てました。その対象はだれかというと、10代や20

代の若い人たちです。若いときにDVの経験をした人は、将来大人になってからDVの被害や加害、つまり当事者になりやすいという知見もありますし、親密な交際を経験をする前、あるいは始めたばかりの段階で行うことで、DVを防いでいこうというわけです。また、先生方のお話にもありましたが、実際に関係が始まってしまうと、なかなか介入が難しいということもあります。こうした若い人向けの予防プログラムは、現在まで全国いろいろなところでされているのですが、わが国ではまだ日が浅く、体系立てられたプログラムはほとんどありません。そのようなわけで、今回、DV予防プログラムを作成、実施し、効果検証を行いました。

この予防プログラムの目的は、大きく二つです。一つは当事者としてのリスク、つまりDVの被害者や加害者になってしまう可能性を減らしていくということ。もう一つは、当事者の周り、そのコミュニティにいる第三者として、DVを予防するための行動がとれるようになるということです。当事者の周りにいる人たちが与える影響が、DVの発生に関わってくるというお話もありましたが、この点も大切な目的として入れました。

プログラムは首都圏の大学を中心に、沖縄も含め5つの大学、13の授業で実施しました。プログラムの構成は、次の3つの部分に分けられます。まずはDVとは何かという知識を得る部分です。DVという言葉は皆さん知っているんですけども、実際に当事者がどういう関係になってしまうのか、暴力の影響はどんなところに表れるのか、そういう関係性や心理的な側面についてよく知ってもらう、知識を得てもらうということですね。これは加害もそうですが、被害を受けた時の認知として、「これはDVなんだ」「嫌だと思ってもいいんだ」と思えるようになるのは、非常に重要なことです。あとの2つは、被害者にも加害者にもならないために、という部分と、第三者としての対人資源性を高めるための部分です。この2つについては主にワークを通じて扱いました。

予防プログラムの構成



■予防プログラムの実施と効果測定

研究対象者を3つの群に分けました。講義だけ受講する群と、演習群と呼んでいるグループワークを取り入れた群と、対照群としてDVとは関係ない授業を受けてもらう群です。まず講義群ですが、授業1コマ90分、講義形式で行いました。今日のような感じで私が前でお話をして、大勢の人に聞いてもらう形です。演習群は、授業2コマ、90分×2回で180分の時間を使って、講義とグループワークの両方を行いました。大体30~40人ぐらいの少人数で、その中で5~6人ずつのグループを作って、ワークの時間をしっかり取りました。

調査の手続きとしては、プログラムが始まる前に、インターネットで回答してもらう形で、調査の参加を呼びかけました。分析対象となったのは、有効回答の得られた257名です。調査は同じ人に4回行いました。まずプログラムが始まる前、次にプログラムを受講した直後で大体3日後ぐらい、それから1カ月後、3カ月後です。プログラムを受けてどのような効果や変化があったかを見ることと、時間がたっても効果が持続するかどうかを見るために、時期を分けて調査しました。

では、その結果をどう分析したかということですが、プログラムの目的の二つがそのまま当てはまります。①被害者や加害者という当事者としてのリスクが低減されたか、②コミュニティ内の第三者としての対人資源が高まるか、という点について、効果が得られたかということです。

まず当事者としての面では、DVに関する「知識」をどのくらい得たか。それから「対パートナー行動」として、被害のエスカレートを防ぐために、難しい場面でも相手に自己主張や批判ができそうかどうかと

いうことと、加害については、攻撃的な感情が起きそうな場面で、その行動を抑制できそうかどうかということです。また「交際不安」として、プログラムを受けたことで親密な交際をするのが怖くなったとか、いわゆる副作用がないかどうかを見ました。「交際相手以外への人へのアクセス」というのは、閉じられた二人きりの関係になるとDVのリスクが高まることから、付き合っている、第三者とのアクセスを続けていくことができるかどうかということです。対象者の中には交際相手がいる人といない人がいますので、いる場合は現状、あるいは将来的な可能性として、いない場合はいと想定した上で回答してもらいました。以上が、当事者としての部分です。

第三者としては、コミュニティの中で、例えば自分の友達ももしかしたらDVの被害にあっているんじゃないか、大丈夫かなと思ったときに、自分から声をかけられると思うか、など対人資源性に関する効力感について分析をしました。

では、その結果がどうだったかですけれど、まず「DVに関する知識」、これは増しました。、結果として、講義群と演習群、どちらも増しています。時間の経過と共に多少下がっていますが、事前と比べると高い状態でキープしています。また、交際していても二人きりで孤立せず、第三者ともつながりを持ち続けるかという点は、演習群で効果が見られました。さらに、受講することで交際不安が高まるという副作用は示されませんでした。では、対パートナーのほうはどうなのか。まず、被害のエスカレートを防ぐために、相手を批判したり、主張的な行動がとれそうかどうかという、とても大事な点については、残念ながら変化がないという結果でした。加害に関しても、攻撃的な行動は抑制できそうかどうかということについて、変わらないという結果で、プログラム後に、当事者としてDVの予防のための行動をする可能性についての効果は、今回の研究では残念ながら得られませんでした。

もう一つの目的である、第三者としての対人資源性という点はどうだったかというと、こちらには効果がみられました。特に演習群については、3カ月後も高い値を保っています。

分析の視点

1. 当事者として

1. DVについての知識・交際不安

2. 対パートナー行動

- 被害のエスカレートを防ぐために：
コミュニケーションにおける批判や自己主張
- 加害の可能性を低めるために：
攻撃感情がおきそうな場面での加害行動の抑制

3. 交際相手以外の人へのアクセス

2. コミュニティ内の第三者として

- 第三者としてどれくらい関与できそうか(対人資源性に関する効力感)

この分析の結果をまとめますと、この予防プログラムを受けることで、当事者に関する要因の中では、DVに関する知識は上昇したのですが、被害と加害を避けるための予防的な行動については変わらなかった、しかし第三者としての対人資源性は高まった、という結果が得られました。また、自分が属するコミュニティに対して、居場所として感じているかという「所属感」についても調べたところ、上がっていたんですね。もともとそんなに高くなかった人が、高かった人と変わらないぐらい上がっていたのは大変興味深い点でした。

■グループワーク例

では、実際にどのようなプログラムを行ったかについて、お伝えしたいと思います。特に、効果が見られた第三者としての対人資源性に関して、演習群で行ったグループワークは、とてもシンプルです。「もしもあなたの友人がDVの当事者だったら何ができそうですか」と問いかけます。例えば友人であるカップルのAさん、Bさんという人たちがいて、どうもAさんはDV被害を受けていて、Bさんは加害をしていそう、ということ知ってしまったときに、「AさんとBさんに対して何ができそうですか」ということを、グループで話し合いました。ただ単にアイデアをたくさん出すのではなく、「なぜそれが必要だと思いますか」、「必要だけど、ちょっとこれ難しいなと思うところはありませんか」とか、そういう問いかけをして、なるべくリアルに状況を想像できるようにしました。いい友達になるとかそういう抽象的なことではなく、なるべく具体的に、できそうなことを挙げていくというワークをしました。大体30分以上かけて丁寧にやりました。

どういう意見が出たかというと、「まず話を聞いて

あげたい」「あなたのせいじゃないよと言ってあげる」とか、「相談できるところがあるよと情報を渡す」とか、結構いろんなことが出てきました。話し合う中で、それちょっと無理なんじゃないの、とか、それやったらかえってだめだよ、ということも、こちらから指摘するというより、グループの中で自然に出てきて、それを考えることによって理解を深めていく様子も見られました。どんどん出して書いていって、それについて話し合いをして、全体で共有してコメントしていくという流れです。



では、あまり効果が得られなかった、対パートナー行動ですが、こんなグループワークをやりました。「こんな場面を想像してください」と言います。皆さんも想像してくださいね。「高校時代からの部活の友達と、恒例の旅行に行くことになっていた日に、交際相手から一方的に食事の約束を入れられてしまった。『その日は他の友達と旅行の約束があるから、行けない』と答えたら、相手からこんな返事が返ってきた。『それ、マジで言ってる？何、予定を勝手に決めてんの？』こんなふうに、かなり怒気をはらんだ言い方で、攻撃的かつ一方的に言われてしまった。さあ、どうしますか？」という場面です。

こういうとき、単に「こうしたほうがいい」とか、道徳的に理屈で伝えて分かったとしても、それはやっぱり本当に表面的なもので終わってしまうのです。私たちがワークで行ったのは、最初にまず「どんな気持ちになりますか」と、感情に焦点を当てました。すごく嫌だとか、勝手な気がするとか、もうどう

していいか分からなくなったとか、いろんな気持ちが出てきます。その次は、「じゃあその気持ちになったときに、相手に対してどういう行動を取れたらいいと思いますか」という、目標的な行動を出してもらいます。例えば、「そういう言い方はしないで、と落ち着いて言えたらいい」とかですね。非常に理想的な行動の案が出てきます。それに対して、さらにこう問いかけます。「でもそれ、本当にできそうでしょうか。実際には難しい場合がありますよね」と。大好きで、付き合っている人から言われてしまったとき、ネガティブなことを言いにくくなる可能性はありませんか、それはどうしてだと思いますか、というようなことを話し合ってもらいます。つまり“何が理想的な行動の妨害要因としてあるのか”ということですね。最後の段階として、「ではその難しさを乗り越えるために、何ができそうでしょうか」と問います。そして、具体的な行動の案をたくさん出してもらいます。グループで一つの意見にまとめるのではなく、こんなやり方もあるんじゃないとか、なるべくたくさん出してもらおう。例えば、面と向かっていうのが言いにくかったらメールやLINEしてみるとかですね。本人が調子良さそうなときに話してみるとか、いろんな意見や案が参加者自身から出てくるのですが、それを評価するのではなく、「いろいろな方法があるんだ、できそうなものもある」ことに気付いてもらう。そういうワークをしました。

■プログラムを実施しての課題と考察

このプログラムを行っての課題と考察です。今回の結果である、予防プログラムによって知識とか態度は変わるけれども、実際の行動やスキルが変化するのには非常に限定的である、という知見は、もう既にある、それと整合的ではありました。ですから今後は、どのように当事者としての被害、加害の脆弱性に働きかけていくかということを考える必要があると思います。実際にプログラムをやって、この結果をふまえて感じたのは、「一次予防」であるがゆえに対象が広い、いろんな経験や背景を持った人たちが集まっていますので、個人差が大きくて、リアルさをとらえ切れてないのではないかと、ということです。また、それをグループの話し合いによってどれくらい深められるんだろう、グループの性質もあり、難しいなと思った点です。その辺りのことは、今回効果とし

て結びつかなかったことの要因でもあると思います。

また効果測定の方法として、将来の可能性について想像して答えているので、実際の行動の変化を図っているわけではないのですね。ですから、実際に暴力的な行動をしてしまった、あるいはなりそうだったとか、はっきりノーと言えたとか、実際の行動を測ることが非常に難しい。それをどのように捉えていったらいいのかということがあります。

また、第三者として、当事者に関わることへの効力感が高まったのはなぜだろうと考えると、まずは、DVの理解がそれを促進するのだと思いました。当事者がどんな気持ちになってしまうとか、なぜ嫌だって言いにくいんだろうとか、暴力の影響ってどんなことだろうということを理解したことによって、例えば被害にあった友達に「あなたが好きで付き合っているでしょう」「はっきり言わないからだめなんだよ」みたいな二次被害を与えずに済むのではないか、それを防ぐ効果があったのではないか、と思います。実際、当事者はすごく感情が揺れ動いたりします。頭で分かっているけどできないとか、すごく矛盾したことをしてしまったりとか、そういった当事者に対して、感情を受け止めたり、サポートをすることにつながっていくのでは、とも思いました。

あともう一つは、プログラムに「第三者として」参加することで、この問題の当事者として考えなくてもいい、ということがあります。ちょっと距離を置いて考えることで、客観的に問題をとらえることができるということです。あまり交際経験がないという人も結構いるのですよね。実際、学生に聞いたとき「僕の友達なんてほとんど付き合ったことない子ばかり、理系だから。それでいきなり、当事者としてとか言われても、まず恋愛自体がファンタジーだからよく分からないと思う」と言われてしまって、確かにそうだな、と。だから必ずしも「自分ごと」ではなく、友達の話としてならどうですか、というスタンスで。もしかしたら少し批判的な意識にもなってくるかもしれないんですけど、そういう距離感であれば、この問題をそれなりにリアルに考えたりできるのではないかなと思いました。

■予防プログラムについての今後の展望

今後のこととしては、今お話したような第三者と

しての効力感がせっかく高まったときに、それを実際どう行動につなげていくのか、そのためにはどんな介入が必要なのか、ということを考えていきたいと思います。また、もう一つ大事なことで、プログラムの実施というのは非常に臨床的な側面もあると思うんですね。実験室でやってる実験ではないということです。参加者それぞれに、当事者としてだけでなく、親のDVの目撃とか、いろんな経験があることもあって、受講によって気持ちが動いたり、こちらが意識しなくても介入的になってしまう面があると思います。プログラム自体が刺激であるといえます。ですから、受講後の反応へのケアやフォローも必要だと思います。こういう機会を通じて、隠れていた被害や加害が出てくることも、まれではないんですね。ですからやって終わりではなく、二次予防的な関わりというか、次につなげていくために、どんなことができるか、そのために予防プログラムを活用していただけたらいいと思います。

以上、DV一次予防プログラムの報告をさせていただきました。ありがとうございます。

司会：それでは指定討論に移りたいと思います。最初に村上先生よろしく願いいたします。

■指定討論

村上史朗（奈良大学社会学部）

村上：ただいまご紹介いただきました、奈良大学の村上と申します。2名の指定討論のうちの1人目ということで、指定討論者としてすべき役割は、まず3名の話題提供者の先生方のお話をざっくりとまとめることです。それから、各先生に対して指定討論者としての視点から質問を投げかけて、皆さんと一緒に考えていくことですね。

まず3名の先生方それぞれに、心理学の視点からDVを軽減すること、それから解消に向けてどういった取り組みが可能かという視点でお話をさせていただきましたが、先生方の話に共通する前提というものがありました。これは、非常に抽象的なまとめになりますが、人の行動は状況によって変わるということが3名の先生方の前提になっていたわけですね。DVを非常に素朴に考えた場合に、暴力を振るう人がいるわけです。その人が暴力的に配偶者や恋人を支配している。このような捉え方は、一般にもある程度浸

透した考え方だろうと思います。

この場合DVの問題の解決はどうなるでしょうか。暴力的な人にできるだけ関わらないようにしよう、関わったら即避けよう、などのように暴力的な人を排除する方向の解決策が考えられます。ところが、既に皆さんお聞きになったとおり3名の話題提供者の先生方はそういった視点での話は基本的にはされていません。加害者、被害者、状況、あるいは環境というのがかみ合ってしまうことによって、DVが生じる、継続する、もしくは悪化するという論点での話になっていたわけです。特に最初の相馬先生のお話でこのような視点が含まれていました。

そこで、個別のプロセスとしては加害者自身の被害者意識という言葉がありましたけれども、これは自己正当化ですね。つまり自分が暴力を振るうことには望ましくはないかもしれないけどやむを得ない正当な理由があるんだと考えるわけです。それから被害者の自罰思考、これもDVの正当化のひとつです。自分の悪い面に注目してしまうために、暴力自体は良くないと思っていたとしても全面的に自分が被害者として振る舞えないということですね。それから第三者として干渉することが非常に難しいことや、第三者に干渉を求めることが難しいといった論点が上がっていたかと思います。

特に社会心理学をベースにしたお話が多かったと思いますが、これらの要素を軽減することが介入としての役割になってくるわけですね。DVを犯罪として捉えるといった視点では、山中先生のご報告の中でも挙がっていましたが、犯罪として考えた場合に犯罪原因論、それから犯罪機会論という考え方がございます。

犯罪原因論というのは犯罪がなぜ生じるかを考える際に、その犯罪の原因を犯罪者の人格であるとか境遇などに求めます。犯罪者がこれまでキレやすい性格であったとか、犯罪者の生い立ちの中での出来事が犯罪に結びつく動機というものを養っていったなどのように、犯罪者の特性・特徴・境遇といったものを犯罪の原因として捉える考え方です。

もう一つは犯罪機会論です。これは心理学のみならず犯罪社会学などでも非常に多く使われる考え方です。これは、犯罪の発生しやすい環境に注目します。これも相馬先生のお話の中にあっただけでなく、犯罪

をしやすくさせるようなきっかけや状況要因などを考えます。今日のお三方の話というのは、どちらかというと犯罪機会論的な捉え方をされていたわけですね。

実際に予防するというのを考えた場合に、犯罪機会論的なアプローチの方が効果的になります。なぜかと言うと、犯罪原因論の観点だと予防するとしたら危ない人を排除したり近づけなかったり、それ以外にはなかなか対処しようがないということになります。この今日お話いただいた3名の話題提供者の先生方は犯罪機会論的な考え方に近いお話をされていたということで、それを踏まえた上で私から2点、論点を挙げて話題提供者の先生方に質問をしたいと考えています。

一つ目の論点としては、3名の先生方共通で挙げられていたのが、第三者の役割が重要だということですね。ここでなぜ第三者が重要なのかということですが、例えばDVの加害被害の関係、夫婦や恋人同士の関係にある人たちにとって第三者というのはなぜ重要になるかということ、それが自分たちの関係がまともなのかそうではないのか、これを判断する基準というのは第三者に求めるしかないからです。

そもそも絶対的な良い夫婦であるとか良い恋人といった基準というものは存在しないわけで、そうするとどれぐらいならまともかな、普通かなというのは自分たちだけでは決めきれない部分があるわけですね。なので、2人の関係の中で、これはDVに限らないですけれども、愛情表現の示し方など良い面だったとしてもエスカレートしてしまって、人前でいちゃつきすぎて眉をひそめられたりするということもあります。DVも含めて、自分たちの関係ちょっと変なんじゃないかというふうに気づくきっかけ、その材料として第三者というものが挙げられるわけですね。

それから、第三者側からのアプローチもあります。周囲の他者からそれはおかしいというふうに指摘されるということです。この第三者の役割というのは非常に重要になるわけです。先ほど言ったとおり、夫婦間、恋人間の関係で何が良いのか悪いのかということに関してももちろん暴力は悪いわけですが、じゃあどこからが悪いのかということ非常に難しいわけですね。絶対的な基準のない行為の場合は周囲の他者の振る舞いが基準になりやすい。これは、親密な二者

関係、夫婦であるとか恋人関係に限らずわれわれの日常的にとっている行為全般に関して、周囲の他者が基準になるというのは非常によくあるわけですね。

ここでいったん夫婦恋人の問題から離れて、どのくらいわれわれにとって周囲の人がやっているということが大きな効果を持つかという研究例の一つを紹介いたします。これは、節電行動を促すためにどんなメッセージが効果的かということを調べたノーランらの研究(Nolan et al., 2008)です。メッセージの条件は5つありまして、環境保護、社会的責任、自己利益、記述的規範、統制条件となっています。例えば環境保護の場合だと、「電力を節約すると環境保護に役立ちますよ」というようなメッセージですね。それから社会的責任の場合は、「市民の社会的責任として電力消費を削減すべきだ」というようなメッセージ。自己利益は「電力節約したらこのくらい得になりますよ」というメッセージ。こういったメッセージに加えて、記述的規範はちょっと分かりづらい表現ですが、これは「周囲の人はもう節電に取り組んでいますよ」というメッセージなわけですね。統制条件は何もメッセージを与えなかった場合です。

これらのメッセージの効果の中で最も節電に効果があったのは、「周囲の人はやっていますよ」という記述的規範のメッセージです。これがなぜ効果があるのかということですが、節電に関しても社会的に合意された「このくらい節電すればいい」みたいな絶対的な基準というものはないですね。そういった場合に何が適切な振る舞いなのかということに関して、周りの人はどうしているかということは適切な行動の手がかりになるわけです。

そういった観点からも、周囲の人と情報のやり取りをすることは重要です。別にDV軽減のためだけではなく、周囲の人と連絡が取れる状態に置いて、例えば他の夫婦ではどうなっているとかそういった情報が入ってきやすい場合には、あれちょっと自分不当に暴力を受けているといった気づきにつながりやすいというような点からも、第三者というのは非常に重要なわけです。

ところが、夫婦恋人などの親密な二者関係に特有の問題として、第三者が効果を持つためにちょっと越えなきゃいけないハードルがあります。これが、「よそはよそ、うちのうち」という考え方です。これ

も話題提供者の先生の話の中にもちらほら出てきていましたね。

ここまでの話を踏まえて、まず3名の話題提供者全員に対しての質問を投げかけたいと思います。夫婦や恋人関係というのはやはりそれぞれの家庭であるとかカップルによって違うものだというふうに捉えられやすいわけですね。当事者の視点としては、例えば他の夫婦はそうかもしれないがうちは事情が違うんだというように、他と違ったとしても参考にしづらい面が出てくる可能性があります。もう一つ、第三者の視点からすると、ちょっとあの家庭おかしいと思ったとしても、外からは分からない事情があるのかもしれないと思って働きかけづらかったりする可能性があります。もう一つは、1回働きかけたけども、「いやうちはいいから」のように拒絶されるとそれ以上続けづらいというような点があります。このような第三者との間のハードルをどう乗り越えたら良いだろうかということについて、その展望を3名の話題提供者の先生にお伺いしたいということが、1点目の質問です。

次は、改善行動の副作用への懸念についてです。実際現状を改善するための方策が有効であったとしても、それを思いとどまらせる要因があるケースがあります。例えば適切な批判や、暴力に対してそれは嫌だということをちゃんとアピールすることが暴力をエスカレートさせないための要因であるというお話がありました。ところが、その批判をすることによってさらに暴力が悪化するんじゃないか、怒らせちゃってさらに悪化するんじゃないか、という懸念も生じ得ます。そういったハードルをどうやって乗り越えるのかということですね。もう一つ、改善が図れたとしても別の副作用が生じるかもしれない。典型的に言えば、DVは止まった、しかし関係が終わった、離婚したという場合ですね。暴力の大きさによっては、むしろ離婚した方が根本的な解決になるというようなケースももちろんあります。なので、副作用を無視してでもやるべきというシチュエーションもあるわけですが、それでも。例えば小規模な段階もしくは予防の段階で考えた場合に、その副作用をどのように解消するというような展望を持たれているのかということですね。具体的には、相馬先生と山中先生に対しては、二つの質問をさせていただきます。

一つは、批判することへの恐怖。これをどう乗り越

えるのかということについて、処方箋なり展望なりというものを伺いたい。

もう一つは、適切な批判をするというのは、実はこれは夫婦や恋人関係ではない対人関係では普通に行われていることですね。われわれは、例えば友達から殴り掛かれたら、「おまえ何殴ってんだよ」というようなことを言うのはそれほど抵抗がないケースが多いわけですが、これは特別な関係でない、通常の対人関係に夫婦関係や恋人関係を近づけるといような位置づけでも捉えることが可能だろうと思われます。すると、特別な関係ではなくなるので、絆の良い面も減っちゃわないかということが懸念されます。特別な関係性であるという意識が暴走して、これだけ自分にとって特別なんだからという形で暴力を振ってしまうのがDVだとしたら、それを解消すると普通の対人関係になって、それはそれでももちろん暴力が解消されれば良いわけですが、絆のメリットは生かしたままで暴力だけ減らすという「おいしいとこどり」ができれば一番いいわけですね。それが可能なかどうかということについて伺いたい。

もう一つ、伊藤先生に対する質問です。個別の行為に関してその意図を推測せずに具体的に考えるという処方箋が示されました。ただ、これ実際にやろうとするとなかなか難しいわけですね。というのも、われわれは例えば電車の中で席を譲っている人を見たときに、「あの人は座席から立った」という具体的な行動として捉えるのはなかなか難しく、「あの人は親切な人だ」というふうにその人の特徴と結び付けて、ほぼ意識せずに自動的に考えてしまう傾向があります。これは社会心理学では繰り返し示されてきてまして、自発的特性推論と呼ばれています。特に意識しなくてもその行動をその人の特性と結び付けてしまう。これを前提にした場合、例えば嫌な行為に注目すると、自動的にその相手は嫌な相手として認識されてしまうのではないかなので、これも副作用の問題になるわけですが、関係を解消することを前提にして考えるのであればそれはいいかもしないのですが、そうではなく関係を改善するという視点で考えた場合に、個別行為に注目してかつ相手の全体印象を変えないというのにどういった方策があり得るのかということですね。ここをお伺いしたいと考えております。すみません、少し長くなりました

が、私からの論点は以上とさせていただきます。

■指定討論

吉澤寛之（岐阜大学大学院教育学研究科）

吉澤：それでは岐阜大学の吉澤と申します、よろしく申し上げます。時間も押しておりますので私のコメントは端的にいきいたいと思うんですが。私をコメンテーターということで呼びいただいた理由として、一つは犯罪という話がありましたが、専門は犯罪とか非行の研究をやっておりまして、加害者の話を専門にしています。前提としてドメスティックバイオレンスは暴力という話で、相馬先生のスライドにもこういった三つの要因が書かれていますよという話がありました。攻撃性があるとかですね、ストレスに弱いとかですね、あとは自己統制のなさだったりですね、この辺りは自分の研究でも注目しているさまざまな要因になります。

ここで今日の話の中で、加害者の方の心理っていうのはどういうものなのかという話は一度もなかったの、それを私の方からお話したいのですが。例えばストレスを家庭に持ち込む人の心ということで、一般的な攻撃性や攻撃的な衝動ではなくて、置き換えられた攻撃という概念があります。これは個人が何らかの挑発的な出来事を経験したときに挑発の原因ではない人や物に対して行われる攻撃行動。例えば職場で上司からひどく怒られて家に帰って妻にあなたというのがこういった攻撃なんです、これが一般的なその人の攻撃性の高さよりも、こういった置き換えられた攻撃をしやすい人のほうがDVをやりやすいということが結果で分かっています。関係ない人に八つ当たりしていいと考えやすい人ほど家に暴力を持ち込みやすいということ。

もう一つですね、DV加害者の心理として他者の不幸を喜ぶ人の心っていうのがどうしてもあるんじゃないかと。シャーデンフロイデっていう現象があります。これはですね他者の不幸、悲しみ苦しみ失敗を見聞きしたときに生じる喜び、うれしさといった心や感情ということで。先ほど相馬先生のほうからDV加害者が持つ被害者意識というのがあったんですけど、こんな状態にしたおまえが悪いんだということで被害者の方を責めると。これはある意味、妬みに近いような感情だというふうに考えられると

思うんですけど、ある研究において妬みの対象の人物に不幸が起こると、脳の報酬に関する部位が活性化するというような知見もありまして。心の痛み、妬みですね、こういったものを強く感じる弱い人ほど他人の不幸で痛みが緩和され、蜜の味になる可能性があるんじゃないかということが考えられます。

もう一つですが、犯罪の領域において、加害者の方ですね。その他者への害を正当化する心性があるということが言われています。これはモデリングで有名なバンデューラが道徳不活性化という概念を紹介してまして、この道徳不活性化の中ではいろいろなメカニズムを使って、人に対する害を正当化するような考え方をしているということが言われています。多くの一般の人にも人への害を正当化する心性があるというような話がされています。

もう一つですが、被害者ですね。被害者の方の心理としてストーカー研究でこのようなことが紹介されておりまして、被害者になりやすい人の特徴としては、母性的であり同情や共感を感じやすく責任感が強いということですね。他者の面倒をみたり尽くしたりすることを好むとか、奉仕的な仕事に就いてるとか、罪の意識を持ちやすく、自己評価が低いというような特徴があるというようなことがあってですね。この辺り、両者の特徴を踏まえた上で皆さまのほうにこちらをご覧いただきたいんですが、警察がDVの被害者の危険度判定プログラムというものを作成しております。その中で加害者側と被害者側のそれぞれの質問がこのようにあるんですが、これを見ていただくとあながち異常な人というイメージじゃないんじゃないかなと。普通の人にも起こり得るような現象じゃないかということがこれらの特徴から見て取れるわけです。こういった背景を踏まえた上で話題提供の先生方にお尋ねしたいというかですね、ご質問があります。

まず一つですが、全ての人に予防教育というのはやっぱり難しいんじゃないかというふうに考えるわけですね。その場合、リスクの高い順に今回の知見を知ってもらいたいんですが、加害者や被害者になりやすい人は予測できるのか、誰でもやっちゃいそうな現象ですよ。これをどうやって的確に予測するかというのが一つ重要な問題だなと思いました。

もう一つ、なりやすい人、なりにくい人ではなくて、相性の問題じゃないかというふうに考えられま

す。例えば私は攻撃性の研究をしているんですが、子どもたちの研究になるんですが、加害者側の攻撃性が高いという要因と、被害者側の攻撃されやすいという要因があるんですけど、それ以外に関係要因というのがあります。特定の2人が組むと攻撃が起こりやすくなる。それを考えるとDVもひょっとしたら関係要因によって説明できるのであれば、その視点はどのように入っているのかなというのが二つ目の質問です。

三つ目が、関係の希薄化が指摘される現代において周囲の人たちがこうした知りを第三者として見抜くことができるのかなというのがあります。実際に山中先生のご発表で第三者の視点でやらないと、当事者はなかなか意識が変わらないという話がありましたので、その辺りが3点目なんです。

もう一つ、周囲の人たちを予防的教育に巻き込むという話になってくるんですが、そのときには潜在的な可能性のある人はいっぱいいるわけで、そういった人たちに啓蒙的にどうやってアプローチしていくのかというのはすごく難しいんじゃないかというふうに考えます。

個別質問で、相馬先生への質問として二つあるんですが、自分たち悪いことしてるのかな、あんまり社会的に望ましくないことしてるんだというのは分かっているんで、なかなかそれを第三者に言うことは難しい可能性がある。そういった孤立しやすいDVのペアを第三者の助けが届くようなネットワークに維持するのはどうしていったらいいのかという話ですね。どうしても加害者側も被害者側を孤立化させようとしちゃうし、その辺りはどういうふうにしていったらいいかというのが質問になります。

伊藤先生への質問なんですが、村上先生のコメントにもあったようにですね、やはり伊藤先生の言われた方法というのはなかなか難しいんじゃないかと。どうしてもですね、例えば好きな人だから好きな人からDVされたときにそれを自分の中で納得するために、ネガティブ行為に意味を持たせるという可能性もあります。抽象的に考えちゃいけないという話があるんですが、私の知ってる範囲内で自己制御の研究で抽象的に考えた方が感情のコントロールがうまくいくという知見もありますので、そういったことで自分のつらい思いを被害者側がなんとかクリアしようとしていると、そういうときに「具体

的に考えろ」と言われてもなかなか難しいんじゃないかというのが一つですね。

もう一つ、皮肉過程理論というのがあります。これはシロクマ実験という名前で有名なんです、「シロクマのことを考えちゃいけないよ」と言われれば言われるほど、シロクマのことが頭に入っちゃうというようなアイロニックな話なのですが。これを考えると具体的にネガティブな行為を考えることがその対である反対側の恋人への行為、好きな思い、愛情というのをより活性化させてしまうんじゃないかということで、なかなか難しいんじゃないかというのがあります。実際に具体的な行為を理由に相手の人柄を嫌いになるとか、相手との関係を断つというのとはなかなか難しいんじゃないかというのが質問なんです。

最後、山中先生ですが、当事者意識や動機付けが介入の結果、高まらなかったということで、やはり必要性を感じている介入への参加者は少なかったということが考えられます。そう考えると、予防的解決というのはなかなか難しいのかなというのが一つ目の質問です。もう一つが、やはり認知的な介入をさせているところがあるのですけれど。どうしても感情処理とかですね、その辺りのプログラムとうまく組み合わせていかないとDVされているときの冷静な判断はできないのじゃないかというのが二つ目の質問になります。ではちょっと長くなりましたが、以上で私の方のコメントを終わらせていただきます。

相馬：お二人の先生、どうもありがとうございます。かなりの部分が今後の宿題だなというのが率直なところで、今後の展開に向けてこういったご指摘をいただけるのは助かります。答えられるものだけ答えていこうと思います。

吉澤先生のご質問について、予防に第三者を巻き込むのは大変だということは予防のコストの話に関連するかと思います。確かにその通りです。ただDVを社会の中で放置することのコストもばかにならないほど大きいことも明らかになりつつあります。例えばアメリカのデータでは、DVがエスカレートした結果として、被害者を保護したり加害者を再教育するといった対応、あるいはDV被害によって働けなくなることで機会コストが生じる結果、大きな経済的損失が生じていることがわかっています。この点から考えると、一次予防として教育の中でDVを

未然に防げるのであれば、そのコストを抑えることができるのではないかと考えています。

また、吉澤先生のお話で、ハイリスクの人たちを見つけれられるかということがありました。欧米にはハイリスク層だけをターゲットにした予防プログラムも実際に行われていまして、最終的にはそれができると理想的かもしれませんが。ただ私の知る限り、日本ではDVのリスク研究さえ不十分であり、残念なことにこれから「ハイリスク」の捉え方とそこへの予防教育の効果をきちんと捉えていく必要があると思っています。併せて相性の問題も考えたいところです。それも、本当はこういった予防の話を考える中で考えた方がよいところではありますが、DVの潜在的な当事者にアクセスするだけでも結構大変でして、今のところは手を付けられずにいます。今後、考えるべき問題だろうと思います。

そして、村上先生からのご質問についてお答えします。まず、フロアの方にも言うべきことでしたが、エスカレートさせないために批判や自己主張して、それがエスカレートしにくくするという議論には条件がつきます。既に暴力が振るわれているとか、もうエスカレートしてしまっているような場合には、ご指摘のように暴力を防ぐ効果があるとは考えていません。難しいと思います。そのような段階になると、もうアメとムチの原理は効かないということが、私の持っているデータでも示されています。批判や自己主張が効くのは、あくまでも暴力がエスカレートしてないエスカレート前の段階なんですね。その先での批判や自己主張によって暴力がエスカレートするというデータを私は持っていませんが、場合によっては悪化することも十分あると思います。ですので、その場合は公的な支援を受けるなどして、個人以外の力も借りて対応しないといけないでしょう。誤解があっては困りますのでもう一度言わせていただくと、批判や自己主張というのはあくまでもエスカレートが始まるか始まらないかを食い止めるだけということです。一端、エスカレートが始まってしまった後では批判や自己主張が逆効果になることはあっても、食い止めることにはならないと考えています。批判や主張が万能ということではないのです。

それと、村上先生からのもう一つのご指摘で、「よそはよそ」と考えてしまって第三者からの影響がなかなか生じづらいのではないかとすることがありま

した。何が暴力にあたるのかの判断でさえ共有が難しいということですね。確かに、その通りだと思います。ですので、実際に我々にできることは、行為レベルで、例えば理由もなく携帯をチェックするとか誰がやってもいいわけじゃないんだよ、と伝えていくしかないような気がします。文脈によっては、ある行為が愛情の表れなのかもしれないけれども、一般的にはやってはいけないことだということを教えるしかないと思います。DV防止法ができた背景にも恐らくそういった実状、つまり家庭内のことは当事者にしかわからないといって公権力が家庭に介入しなかったという現状があったのではないかと思います。暴力の線引きが難しいからと、介入せずにいることで被害が深刻化してしまう。絶対的な基準といえないまでも最大公約数的にその定義を考えていくことで、深刻な被害を防ぐしかなかったのではないかと思います。

それと、もう一つの指摘。批判や自己主張をして暴力だけくい止めましようと言ったところで、元々の関係のかけがえのなさといったポジティブな効果も失われてしまうんじゃないかということでした。今のところ、予防プログラムをやったり調査研究をしている範囲では、批判や自己主張をしても、特にもともとの絆がもっていたサポーター的な側面が損なわれることはないようです。

伊藤：ご質問ありがとうございます。まず村上先生のご質問に私も答えられる範囲でお答えさせていただきます。

人間は意識しなくても行為を自動的に抽象化してしまうと、特に特性と結びつけてしまうような、自発的特性推論ですとか、そういったことが起こることなんですけども。確かに本当に人は抽象的に考え過ぎですよ。具体的に考えるというのがなかなか難しい側面があるんですけども、一つ言えるのは、問題のない相手と付き合っているときであれば、別に抽象的な推理を行うことに何も問題はないわけですね。目の前の、その、ダメンズといいますか、駄目な相手と付き合っているのを通り過ぎるまでは、何とか具体的な推論を行うように、強制的なプログラムを行うということが必要かと思うんですね。その際に、例えば先ほど申し上げましたスマートフォンを利用した介入ですとか、その一定の期間、この人に対する嫌だという気持ちが固まるまでの間、

具体的な推論、難しいけれども介入、スマートフォンなどを利用した介入を通じて何とかやってもらうという形で考えたいなと思っております。

あと、認知行動療法ですね、例えば臨床心理学の分野で。きょう遅刻したと、忘れ物をしたと、具体的に考えずに、また自分は駄目だと、そこから抽象化をしてしまうと、非常に抑うつに陥りやすいと。人間の概括的な認知、抽象的な認知を行ってしまうと抑うつに陥りやすいというので、認知行動療法などでは具体的な場面に立ち返って考えようと。本当にその抽象化はできるの、必要なというプログラムを開発しているわけですが。認知行動療法などを参照しながら、まだ現時点では私の中では明確な答えはないんですけども、何らかのプログラムを作ることができるのではないかと考えております。

そして、全体の印象を変えないためには、つまり悪い行為を想像させることで恋人のことを嫌いになってしまうんじゃないかというようなご質問があったかと思うんですが、アメの部分では積極的に抽象化を行えばいいと。つまり私のデータでは先ほどポジティブな行為は抽象化を行っても、よりポジティブになるということはない、というような結果が今回の研究から出ているんですが、他の研究も私は複数行っておりまして、その研究では、基本的には抽象的に考えると非常にポジティブな部分が見えてくると。物事のポジティブな面が見えてきたり、あと他者への共感が促進される、援助行動が促進される、抽象的に考えると援助を行うということが分かっておりまして。つまり、対人的な距離を近づけるような効果が抽象化にはあるわけですし、何か非常にポジティブな面に抽象化の効果を使ってやることによって、トータルで相手に対する嫌な印象というものを増幅させないようにできるのではないかなと考えております。

吉澤先生のご質問にお答えさせていただくんですけども、加害者や被害者になりやすい人がいる、予測できないのではないかと事前に、というご指摘があったかと思うんですが、私の研究ではその具体的な、深刻なDVに至る前の一般的な対人的な関係の中で、恋人間の関係の中で、ちょっと嫌だということをはっきり嫌だと言う、というところで考えておりまして。つまりですね、DVに至る前の脆弱性の部分に働きかけたいと考えておりますので、例えば社会

心理学の一般教養的な授業を通じてですとか、一般的な知識としてより啓蒙を行っていきたいと考えております。また、周囲の人たちを予防的教育に巻き込むコストについてなんですけれども、やはりそこもスマートフォンを活用して、何らかのことができないかなと考えておりまして。スマートフォンを使って自分を知れるというようなアプリは、結構みんな使いたがると思いますか、自己理解が何かこう、より深まりそうなアプリをダウンロードをするんですが、そのスマートフォンを利用して何か介入的なことができないかなというふうに考えております。そこで自動化できないかなというふうに考えております。

皮肉過程理論、つまり具体的にネガティブな行為を考えることが、好きな人の良い面をかえって対比効果的にこう、思い出させるんじゃないかなというようにご指摘ですが、これ本当に面白い指摘でして、仮説として、まあデータを取ってみたいと分かりませんので、検討してみたいと思います。

あとですね、抽象的に考えたほうがセルフコントロールに役立つような、自己制御研究の知見があるというお話だったんですけども、セルフコントロールしてしまうからDVに巻き込まれやすくなると、私は考えてしまうんですね。つまり、殴られて嫌だという感情を抑えて自己制御によって、つまり認知の力で感情を抑え込んで、私のために思ってくれたんだと自己制御するからこそ、つまり2人の運命的な関係という目標に向けて自己制御するからこそ、こういうのが嫌だと感じないと考えていますので。つまりセルフコントロールの負の側面のようなものをあぶり出しているのが、今回の研究なのではないかなと考えております。ありがとうございます。

山中：村上先生、吉澤先生、ご質問ありがとうございます。まず村上先生のご質問から、相馬先生がお答えになったところ以外のところで付け加えさせていただくと、確かに、相手の攻撃的な言動に批判的に対処することは、ちょっとやっぱり難しいと感じたり、相手が怖いとか、先生もおっしゃったように、エスカレートしてればもちろんですけども、まだ付き合って日が浅いときでもそう感じることもあると思うんですね。それを考えるときに、二つのことがあると思います。まず一つは、嫌われてしまうんじゃないかというようなことがあるとすれば、自己肯定感と

か自尊感情ということにも関わってくるのかなということ。例えば先ほどの吉澤先生のお話の、被害者の心理でもありましたけれども、「そういうことされていい自分じゃないんだ」と思える気持ちがないと、否定することは難しくなると思います。ただそれは、その人がもともと持っているものもあるかと思うのですけれど、もう一つは、暴力の影響としてそうってしまったという可能性もあるのですね。どちらにしてもそのようなときに、その人の気持ちや価値観を否定しないことが大事だと思います。「嫌われてしまったとしても言ったほうがいいよ」と言うだけではなく、「ああ、それは嫌われるの嫌なんだね」「仲良くやっていきたいんだよね」というところは否定せず、「じゃあ、安全に伝えられるのはどうしたらいいのかな」というようなところで、具体的な方法を一緒に考えて、まずそれをやってみよう、ということでしょうか。これは1人だととても大変なので、先ほどのようなグループとか、あるいは個別の介入が必要になってくると思います。もう一つの点は、怖さが多少でもある時点で、それってどうなの、と振り返る材料になればいいと思います。なぜちょっと怖く感じるんだらうって、振り返ってみたときに、じゃあ安心して言える相手と何が違うのとか、同じ相手であっても、前は言えたのに、今言えないのは何でだろう、というふうに、変化してきた関係性が表れている可能性があると思いますので、そこに持っていけたらいいと思います。

それから吉澤先生からのご質問で、関係の希薄化があって、当事者に見抜けるのか、限界があるのではないかとおっしゃるご指摘は、本当にその通りだと思います。確かに、本人から「実は私こんなことされてて」というのは、決して多くはないんですね。めったにないと言ってもいいくらいです。ではどうしていったらいいかと考えると、それよりもっと手前の、日常のすごく些細なことをキャッチする感度を上げていくことかなと思うのですね。具体的に誰がというよりも、周囲のみんなが、ですね。例えば少し暴力的な言葉だったり、束縛が激しかったりするときに、「そこまでされちゃうのってちょっとどうなの」「よくそれで我慢できるよね。私だったら嫌だな」とか、何気ない言葉や態度。そうやって、みんなで広く浅く、コミュニティーの風土を作っていくこと、キーパーソンが何かをするというより、みんなで少しず

つ予防的な行動をしていけたらいいんじゃないかなと思います。

それから、動機づけが高まらない点も、本当にそれも難しい、課題なんですね。できるだけ自分に引きつけて考えてほしいと思うんですけども。私がやっていることの一つは、これは社会的な問題なんですよ、という認知をもってもらうことですね。個人的なことに本当は落としてほしいんですけども、まずは社会的にこれだけの問題になっているというデータや統計を出したり、なるべく具体的な事例を出すようにしています。具体的な事例だと、そのまま同じ経験ではなくても、どこか引っかかるものがあるようです。ただ、そこで気を付けているのは、ショック療法では駄目。それは副作用が非常に大きいし、効果も限定的だと思います。それでもどうしても自分のこととして考えられなかったら、じゃあ友達には何ができそうですか、というような社会的資源という視点で考えてもらえるようにする。一次予防としては、取りあえずそれでもいいのかな、と思っています。

あともう一つ、認知だけではなく感情の面も問題があるのではないかということ、本当にその通りだと思います。先程ご紹介したプログラムの中でも、感情に焦点を当てる部分を必ずいくつか作っています。「このときどういう気持ちになりますか」と振り返ってもらうのは、たとえ数分でも入れています。そして、その感情を否定しないということですね。そういうふうと思うことは自然だよ、でも行動とは別なんだよ、感情と行動ってちょっと違うんだよ、と

いうところに気付いてもらうように促しています。

ただ、そうは言っても予防プログラムだけでは限界があるのも事実で、予防プログラム、プラスアルファというか、本音が言える場所であったり、プログラム後に受講者がクールダウンできるような、自分の中で実際どう思ったということを、指導者や先生が介入しないで本音が言える場所が必要だと思うし、それがあってプログラムの効果も上がっていくように思います。私からは以上です。

(この後フロアとの質疑応答に移り、多くの質問やコメントで大変活発な討論が続きましたが、紙幅の関係もあって、割愛させていただきます)

角山：きょうはご登壇の先生がた、本当にありがとうございました。いま非常に、重要な問題になっているDVについて、大変有意義なディスカッションができたと思います。時間も過ぎ、遅くなりましたけれど、最後までご参加いただきまして、またフロアから大変、有意義なご質問をいただきまして、非常にいい公開シンポジウムになったのではないかと思います。なかなかこちらのほうで応用心理学会の公開シンポジウムというのを開く機会がございません。どうしても関東、東京近辺になってしまいましたけれども、またこういう機会がありましたら、関西方面と言いますか、京都、奈良、大阪、広島というようなところでも会員の皆さんと一緒にこうしたことを考えていきたいと思います。きょうは本当に遅くまでご参加いただきまして、どうもありがとうございます。